

『杜子春』 芥川龍之介

一

或春あるの日暮あです。

唐たうの都洛陽らくやうの西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

若者は名は杜子春とししゆんといって、元は金持の息子でしたが、今は財産を費つかい尽つくして、その日の暮しにも困る位、憐あわれな身分身分になっているのです。

何しろその頃洛陽といえ、天下に並ぶものがない、¹
繁昌はんじやうを極めた都ですから、往來おつらひにはまだしつきりなく、人や車車が通とつていました。門一ぱいに当あっている、油あぶらのよ
うな夕日ゆふひの光ひかりの中に、老人らうじんのかぶった紗しやの帽子ぼうしや、土耳古とるこ
の女おんなの金きんの耳環みみわや、白馬はくばに飾いろいとった色糸たづなの手綱てづなが、絶えず流
れて行く容子ようすは、まるで画えのような美しさです。

しかし杜子春は相変あひからず、門の壁かに身みを凭もたせて、ぼんや

り空ばかり眺めていました。空には、もう細い月が、うら
うらと靡なびいた霞かすみの中に、まるで爪の痕あとかと思う程、かす
かに白く浮んでいるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうど「へ行っても、
泊めてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生
きている位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまっ
た方がましかも知れない。」

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないこと
を思いめぐらしていたのです。

するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、
片目すがめ眇めがの老人があります。それが夕日の光を浴びて、大
きな影を門へ落すと、ちっと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考へているのだ。」と、横柄おうへいに言葉をかけま
した。

「私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものか
と考へているのです。」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏
せて、思はず正直な答をしました。

「さうか。それは可哀そうだな。」

老人は暫くしばしば何事か考へているようでしたが、やがて、往来にさしている夕日の光を指さしながら、

「ではおれが好いことを一つ教えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから。」

「ほんとうですか。」

杜子春は驚いて、伏せていた眼を挙げました。所が更に不思議なことには、あの老人はどこへ行つたか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。その代り空の月の色は前よりも猶なほ白くなって、休まない往来の人通りの上には、もう気の早い蝙蝠が二三匹「フ」もりひらひら舞っていました。

二

杜子春とししゆんは一日の内に、洛陽の都でも唯一人という大金持になりました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそつと掘って見たら、大

きな車にも余る位、黄金が一山出て来たのです。

大金持になった杜子春は、すぐに立派な家を買って、

玄宗皇帝にも負けない位、贅沢な暮らしを始めました。

蘭陵の酒を買はせるやら、桂州の竜眼肉をとりよせる

やら、日に四度色の変る牡丹を庭に植えさせるやら、白

孔雀を何羽も放し飼いにするやら、玉を集めるやら、錦を

縫はせるやら、香木の車を造らせるやら、象牙の椅子を

誂へるやら、その贅沢を日々書いていては、いつになつ

てもこの話がおしまいにならない位です。

するとこういう噂を聞いて、今までは路で行き合っ

ても、挨拶さえしなかつた友だちなどが、朝夕遊びにやっ

て来ました。それも一日毎に数が増えて、半年ばかり経つ内

には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜

子春の家へ来ないものは、一人もない位になってしまった

のです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開

きました。その酒盛りの又盛んなことは、中々口には尽さ

れません。極ごくかいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から来た葡萄酒を汲てんじくんで、天竺生れの魔法使が刀を呑んで見せる芸に見とれていると、そのまわりには二十人の女たちが、十人は翡翠ひすいの蓮の花を、十人は瑪瑙めのうの牡丹の花を、いづれも髪に飾りながら、笛や琴を節面白く奏そしているという景色なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅沢ぜいたく家の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になり出しました。そうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通ってさへ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになって見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸そうという家は、一軒もなくなってしまうました。いや、宿を貸す所か、今では椀に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行って、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立って

いました。するとやはり昔のように、片目眇すがめの老人が、どこからか姿を現して、

「お前は何を考へているのだ。」と、声をかけるではありませんか。

杜子春は老人の顔を見ると、恥しそうに下を向いた儘まま、暫しばひくは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切そうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じように、

「私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考へているのです。」と、恐る恐る返事をしました。

「そうか。それは可哀そうだな、ではおれが好きなことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好き。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつている筈だから。」

老人はこう言ったと思うと、今度も亦人またごみの中へ、掻き消すように隠れてしまいました。

杜子春はその翌日から、忽たちまち天下第一の大金持に返り

ました。と同時に相変わらず、仕放題な贅沢しほうだいをし始めました。庭に咲いている牡丹の花、その中に眠っている白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使いすべてが昔の通りなのです。

ですから車に一ぱいあつた、あの夥おびただしい黄金も、又三年ばかり経たつ内には、すっかりなくなってしまうました。

★テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストをもとにしています（一部加工しています）。

「青空文庫」<http://www.aozora.gr.jp/>